

私の一冊

社会福祉学科 庭野晃子 先生

落合恵美子著 『21世紀家族へ：家族の戦後体制の見かた・超えかた』

小鹿図書館 : 367.3/O 15 (有斐閣選書)

現役の短大生さんは、「両親は共働き」という人のほうが、親のどちらか一方だけが働く片働き世帯より多いのではないのでしょうか。1990年代以降、共働き世帯は片働き世帯を上回り、今後も増加するといわれています。でも昔は異なりました。いまから遡ることわずか40年前、片働き世帯の方が共働き世帯より圧倒的に多かったのです。結婚した女性の過半数が「専業主婦」だったからです。

日本では、1960年代「主婦」が大衆化したそうです。私は、この本を読んで、「ある時代に女性が主婦化したこと」をはじめて知りました。そして、「1960年代に『主婦』が大衆化したのなら、それ以前は、だれが子育てをしていたの?」、「戦後、女性は社会進出を果たした、とよく聞くけれど、それは誤解なの?」といくつかの疑問をもちました。

この本には、これらの疑問に対する答えが書いてあります。

ひとつめの疑問の答えは、江戸時代や明治時代、子どもの世話をするのは乳母やお手伝いさんの役割だったそうです。当時「産みの母親が子どもにおっぱいをあたえること」は、一般的ではなかったということです。ふたつめの疑問の答えは、戦前の女性は、畑仕事や稲作労働等、家業を支える重要な労働者のひとりでした。つまり、女性は戦後社会進出したのではなく、戦後「主婦になった」というのがこの本の答えです。

私にとってこの本は、ほんとうに衝撃的で、人生の転機となる一冊になりました。

以後、わたしの家族の「見かた」が一変しました。家族だけではありません。恋愛、結婚、男女、教育、環境、社会規範・・・固定観念に縛られていた私の価値観が変化したのはいうまでもありません。そして、幸か不幸か、この本を契機に、家族研究の世界へ足を踏み入れてしまいました。

今回「私の一冊」を書くために、久しぶりにこの本を読み返してみました。まったく古さを感じません。「時代によって、家族や子育てのあり方は異なる」という著者、落合恵美子氏のシンプルなメッセージが、現代の子育ての常識を見直す契機を与えてくれます。

ここで、現代の子育てについて考えてみたいと思います。もし、母親が子どもの世話をせず、他人に任せていたらどうでしょうか? その母親を「ネグレクト」だと非難する人もいるでしょう。現

代では、世間は、子どもの世話を母親の役割として過剰に期待していますね。子どもの行動に問題があれば、大抵、母親にその責任が向けられますね。でも、産みの母親が子どもにお乳をあたえ、食事や寝かしつけ、教育にいたるまでの子どもの世話全般をするようになったのは、たかだかここ数十年のことです。現代における世間の母親に対する「まなざし」は、現代社会に特有なことなんです。戦後日本の高度経済成長が、企業に勤めるサラリーマンと専業主婦をうみ、性別役割分業を形成し、「子育て＝母親の役割」という構図をつくったのです。

さて、冒頭で述べたように、90年代以降、家族のあり方は変化してきました。出産後も就労継続する女性も珍しくなくなってきています。男女平等の考えが少しずつ広まってきたことや、経済的不況等の理由から、共働き世帯が増えました。このような時代のなかで、高度経済成長期に形成された「子育て＝母親の役割」という構図は、今後も続くでしょうか？学生のみなさんはどう思いますか？

ここで、わたし自身の希望をふくめ 2050 年ごろの子育てを予測してみたいと思います。みなさんが 60 歳位になっている頃でしょうか。

「子育て＝母親の役割」という規範は薄れ、「子育ては、父親と母親が協力して行い、地域の人々とかかわりながら行う」のが一般的になっている…これが現実となれば、いま話題になっている「イクメン」(育児をする男性たち)は、いまほどマスコミから賞賛されなくなるでしょう(なぜなら、男の育児が当たり前になっているのですから!)。「イクメン」はチヤホヤされなくなりますが、長時間労働が改善され、過労死が減り、ワーク・ライフ・バランス(仕事と家庭の調和)がうまくいく社会になっているのではないかと予測してみました。

家族の歴史を振り返りながら、未来予想図を描くこともできる「私の一冊」を学生の皆さんにも読んでいただきたいと思います。